

私のシェリー研究ノートより

『生の凱旋』と「オジマンディアス」

付 ホラス・スミス作「オジマンディアス」

笠原 順路

作品との出会いも、人生におけるさまざまな出会いに似て、最初の印象が、その後の作品への態度を決定づけることがある。スウィフトの『ガリバー旅行記』も、原文でも読み、教室でも何度か講じた今となっても、幼い日々、絵本で見たあの『ガリバー旅行記』の興奮が、私のガリバー観の根底に、頑迷なまでに脈打っている。私にとっての『生の凱旋』も、ちょうどそうした作品だ。

もう十数年前、最初は研究社英文学叢書の齋藤勇博士の註をたよりに読み始め、その後ペトラルカの『凱旋詩集』にも当たり、ライマンの詳註も適宜参考にし、必要に応じて各種の原資料にも可能な限り当たったが、やはり初読の時の印象には消し難いものがある。

それは何かといえば、恥ずかしいことだが、齋藤博士をはじめ諸家が異口同音に言うほどには生の醜さや愚かさに対する悲観的考え方が読み取れなかったことだ。それどころか、「生」の凱旋行列に連なる人々の描写には、一部に、力、そして力ゆえの美さえ感じられたのであった。

この十数年間に私がシェリーについて書いたものの大半は、「生」に対する肯定的ともいえる態度、と私が考えるところのものを正当化しようとしたものだと言っても過言ではない。だから、専ら『アドネイス』第52聯以後のシェリーについて書いた。如何にしてシェリーが啓蒙主義から抜け出ていったかについては、どちらかという、単純な図式の様には思えたのだ。(再び恥ずかしながら急い

で付けたすが、最近になってやっと、啓蒙主義からロマン主義への移行の部分の重要性も理解できるようになったし、その面への興味も湧いてきた次第である。)

そうこうするうちに、アンジェラ・レイトンの、『生』の凱旋車は、悲観的に解釈するには、その描写に用いられている言葉があまりに美しすぎる^{注1} などという意見に励まされ、次第々に焦点が定まってきた。文学をも含めたところの、ヨーロッパの藝術一般にみられる凱旋様式の伝統という観点から考えることが重要なのではないか、と。

その凱旋様式の伝統がシェリーを取り巻く環境において具体化するのが、1819年、春、ローマにおいてである。この時、シェリー一行は当然のこととしてローマの復活祭の各種の祝祭行列も目のあたりにしているはずである。

ローマのティトゥス帝戦勝記念凱旋門に特有の浮き彫りの特徴が、シェリーの描く「生」の凱旋行列に連なる人間の描写と似ていること、そして、シェリー自身のティトゥス門の描写に書簡と散文において微妙な相違があること、虹の凱旋門というイメージが出てくる作品がいずれも1819年春以降に書かれていること等、『生の凱旋』研究の上

注1 Angela Leighton, *Shelley and the Sublime: An Interpretation of the Major Poems* (Cambridge U. Pr., 1984), p. 161.

で重要と思われる点は既に指摘し、^{注2} その先を有機的にまとめ上げ得ぬままに数年が経つというのが、第一印象に忠実な研究者としての現状である。ただし、全く方向が見えていないというわけではない。

* * *

ダンテの『神曲』からT.S.エリオットの『荒地』へとつづく、韻文による都市文学の流れのなかでこの作品を見ていくこともまた大切であろう。その際、ワーズワスが『序曲』において描いたロンドンというのも、われわれには、重要なヒントになろう。無論シェリーが『序曲』を読んだはずはないのだが、直接的な影響関係がなければ、その分だけなおさら、共通点は（仮にそれがあるとして）同時代人の都市的現実認識の現われということになるはずだ。

T.S.エリオットがシェリーの作品のなかでは唯一『生の凱旋』を好意的に評価していることは、今さら言うまでもないが、シェリーとT.S.エリオットをつなぐ鍵をにぎっているのが、私見ではジェイムズ・トムソン James Thomson(“B.V.”)だと思う。スコットランド出身で、主にロンドンで活躍したヴィクトリア朝の詩人で、『四季』を著わした18世紀のジェイムズ・トムソンと区別するため、自ら私淑する二人の作家の頭文字をつけて、筆名としたのである。Bはシェリーの間名 Byssheの、そして、Vはドイツの詩人ノヴァーリスのアナグラム V anolisの、それぞれ頭文字である。そのジェイムズ・トムソン(“B.V.”)の代表作『恐ろしき夜の都市』*The City of Dreadful Night*(1874)は詩人が幻想のうちに試みた都市彷徨の記録ともいべき作品だが、『生の凱旋』からの表現上の影響たるや、目を見張るものがある。ヒース＝スタップズの言葉を引用しておこう――

シェリーの詩の随所には、そしてキーツの『ハイペリオンの没落』には、ダンテの影響を読み取ることができる。しかし、唯一、後者の作品、およびシェリー

の『生の凱旋』においてのみ、われわれは、両詩人がその生涯の終わりにおいて、寓意的ではありながら単なる寓意を超えたある手法に到達し得た、と認めることができるのである。その手法とは、ダンテの場合と同様、ロマン主義的想像力から生み出された夢というものに関連したイメージが、意識的な形而上的思考と有機的に結びつき、それによって感受性の統一が達成される、という手法である。しかし、シェリーやキーツの死後、その大方のヴィクトリア朝の後継者たちは、この手法を発展させようとはしなかった。彼らはロマン派が用いたイメージを、単に装飾的に用いることで足りるとし、知性の領域での諸探究とのつながりを持たせようとはしなかったのである。しかし、『恐ろしき夜の都市』におけるトムソンは、その注目すべき一つの例外である。^{注3}

* * *

単純な二項対立は決して好むところではないが、結果として、私の第一印象が「生」に対して楽観的態度、トムソン、T.S.エリオットの解釈が「生」に対して悲観的態度、となってしまったようだ。問題は、その比率はどうか、という点であろう。少なくとも、自己の批評理論を補強するために文学テキストとやらを用いるのではない以上、そのことが最終的な問題になってくる。

結論からいうと、(凡庸な結論だが)楽観的態度と悲観的態度の拮抗が作品を面白くしているのだと私は思う。純然たる作者の死によって未完に終わった作品を、何か、必然性のある未完のように言うのは、大いにはばか

注2 「シェリー、凱旋門、そして生」高松雄一編著『想像力の変容』(研究社出版、1991)、pp.171-98

注3 John Heath-Stubbs, *The Darkening Plain* (London: Eyre & Spottiswoode, 1950), pp.114-15.

られるが、やはり、“I became aware/Of whence those forms proceeded...(516-7)”以後、シェリーは楽観的態度と悲観的態度のバランスが保てなくなり、一時、筆を描いていたのではないかと推測される。『生の凱旋』の未完性の解明には、516行目以降の分析が不可欠と思われる。そして、その際、有益なヒントになるのが、ペトラルカの『凱旋詩集』であると私は見ている。しかも齋藤博士が「Shelleyが負ふ所あるは、初めの *Trionfo dell'Amore* だけである」と述べた「愛の勝利」にではなく、最後の「永遠性の勝利」に。

* * *

いずれにしても『生の凱旋』の面白さは、他のシェリーの優れた作品と同様、拮抗する

力と力にあるといってもよいだろう。ちょうど、オジマンディアス王の権勢慾がしかと刻み込まれた顔面が「半ば砂に埋もれて」いるのと同じように。

ソネット「オジマンディアス」結末部での遠景、茫漠とつづく平かなる砂の広がり、やがては地上の全てを平準化する至高の権力者《時》の勝利を象徴している。しかし、近景では、シェリーにとっては唾棄すべき地上の権力者の権勢慾が、詩人と同類の石工の技により、砂上で雄々しくも《時》に対抗している。《時》そして《必然》を一方的勝者にしていないところが、いかにもシェリーらしいところだ。そして、オジマンディアス王の像にしても、凱旋門にしても、歴史的規模での人間の愚行を讀める建造物なのだ。

(東京大学助教授)

OZYMANDIAS

Horace Smith

In Egypt's sandy silence, all alone,
Stands a gigantic Leg, which far off throws
The only shadow that the Desert knows:—
“I am great Ozymandias,” saith the stone,
“The King of Kings; this mighty City shows
“The wonders of my hand.”—The City's
gone, —
Nought but the Leg remaining to disclose
The site of this forgotten Babylon.
We wonder, — and some Hunter may
express
Wonder like ours, when thro' the wilderness
Where London stood, holding the Wolf in
chase,
He meets some fragment huge, and stops
to guess
What powerful but unrecorded race
Once dwelt in that annihilated place.
—from *The Examiner*, 1 February 1818.

オジマンディアス

ホラス・スミス作

エジプトの砂漠の静寂のなか、ただ一人
立つ巨大な脚。はるか彼方に投げやる
影も、砂地の上に落ちるのみ。
その石曰く—我、おおいなる
オジマンディアスにして王のなかの王。この
壮大の都市、
余の手のなせる奇蹟、と。もはやその都市と
てなく、
脚のみのこり、忘れられし
バビロンの地を示す。
我らのおどろきは、とある狩人の
おどろきに
同じか—かつてロンドンの栄えた荒野に
狼を追う狩人が、巨大な断片を見、
さて、この消滅した地に住んでいた
壮大で記録にもない人種とは何かと
思う、そのおどろきに。

笠原順路訳

(シェリー作「オジマンディアス」
との競作ソネット)